

歴史ガイド

坂本龍馬

「オリジナリティ」を大切にした稀有な日本人!!



坂本龍馬は、江戸幕末、物凄い勢いとスピードによる新しい価値認識の変化に見舞われようとしていた激動の時代、土佐藩（いまの高知県）の郷士の家に生まれました。階級的には土佐藩の武家の最下層ながら、本家の「才谷屋」は土佐有数の豪商

であり、上士よりはるかに裕福な家庭環境にありました。

幼少のころ、寝小便タレで、泣き虫でした。勉強についていけず塾を退塾しました。それでも少年時、水練（水泳）に出かける途中、友人に「こんな雨で泳ぐのか」と問われ、「濡れるのに雨も関係あるか」とそのまま川に行ったというエピソードがあります。

後に土佐勤王党盟主となる武市瑞山（通称・武市半平太）とは、遠縁に当たり、「アギ（あご）」「アザ（痣）」とあだ名で呼び合う仲でした。

龍馬は後世、「オリジナリティ」を大切にした稀有な日本人と評されるように大成していきます。こうした龍馬の人格形成に多大な影響を与えたのは、父・八平の後妻・伊興の実家、下田屋（川島家）といわれています。

龍馬は、姉・乙女とともに浦戸湾を船で漕ぎ、当時土佐藩後船蔵のあ

る種崎にある川島家をたびたび訪れて、長崎や下関からの珍しい土産話などを聞き、世界地図や数々の輸入品を見て外の世界への憧れを高めました。また姉・乙女の夫の家にもよく遊びに行き、屋根に上って太平洋を眺めていたそうです。広い海原を眺望しながら、未知の新しい世界への飛翔を夢見るスケールの大きい人物が育てられていたのです。

何よりも太平洋は、臨機応変に新しい価値認識の変化できる柔軟思考の人物を育てるのに、絶好の自然環境でした。また、坂本家の本家が豪商であったのは、龍馬に「海外貿易」の目を開かせるもってこいの生活環境でもありました。土農工商の最上級身分に位置しながら、士分の最下級である「郷士」の地位にいたことは、何より、封建体制の身分制度にこびりついていた「陋習」、「固定観念」を何の未練もなく、バツサリと断ち切れる、皮肉にも最適な境遇でした。

龍馬は、長じて身長六尺（約一八二cm、一七四cmや一六九cmという説もある）江戸時代の当時としてはかなり大男となります。背中に黒毛が生えていたといえます。

龍馬は、三十一才という短い人生の間に、二度、大きな「転回」をしています。

一度目は、土佐勤王党の攘夷派としてきた龍馬が、開明派的行動に大きく変化した瞬間です。土佐勤王党の盟主・武市瑞山のメンバーから、これとは異なった道を歩み、勝海舟に接近していきます。二度目の大きな「転回」は、その後、大政奉還に至る土佐藩にこだわりながら、藩を超え、それを議会論によって具体的に構想して行く過程での大きな変化です。

◎一八三六年（天保七年）一月三日、坂本龍馬は、土佐藩郷士・坂本八平、母・幸の二男三女の二男（末子）として生まれました。兄・権平、姉・千鶴、弟、坂本乙女（おとめ）。

◎一八四六年（嘉永三年）母・幸が死去する。十二歳の時、小高坂の楠山塾で学ぶが退塾。十四歳で高知城下の日根野弁治の道場へ入門し、下士の習う小栗流和兵法を学ぶ。

出展協力：(株)ブレイン 参考文献：「坂本龍馬」に学ぶ経営学